

40.

つつじの燃えている雲仙に来て俳話を行った。次のような趣旨を語ったのである。

譬えに喫煙用のライターを見てください。よい油を入れてありますから発火すると燃え続けるでしょう。油もなく空っぽであれば火花を飛ばすだけでもえませんね。

さて俳句をつくろうとすれば油が必要です。油は作者の愛です。自然を愛する真心です。自然をよく観察して自然と自己が融けあう気分を養うことです。

「松のことは松に習え」ということです。

そうでなかったらいくら事物を見て詠んでも印象とならずに消滅するのです。

芭蕉は言いつけて何か有ると戒めました。心に残るものの大切さを訓えたのであります。

自然は春夏秋冬の変化を示す。

自然は詩人に倦ますことをやらない。

41.

白い卵の花が盛りだった。乙女峠の坂道は短いが私の足にやや急だと思ってゆっくり登ろうとした。

そこにホルバート神父がにこにこ佇っておられた。ちびたスコップを片手に路肩の修繕に労働されていたのだった。

ゆきずりに私たちへ会釈される。そしてこんな仕事せぬと身が錆びますと、使用せぬナイフの錆びるのに譬えた洒落をとばされた。

マリア堂まで辿りつけたのもこの一言に元気を与えられたおかげである。

ふだんなまけていて俄に句作しても効果がうすい。俳句は錆びないように日頃の努力が重要である。表現技能も肥え、観察も新しく細やかにすることができる。

42.

一に明晰、二に明晰、三に明晰、と志賀直哉が文章の道に戒めたとか。なるほどその言が当たると、直也の書かれた作品を読んで首肯してきた。

このことは簡潔を重んずる俳句にうつしても同じことが言えると思う。

作者の心を打つ対象が明晰であれば、鑑賞が楽しくなる。

明晰とは詳細にというのではない。ポイントを明らかに絞るのである。つまり要領を得ることである。作者自身が朦朧であったり饒舌であったりではダメである。

楽しい鑑賞は作者の説明を聞くことではなく、作者のこころへ素直に共鳴させられることだ。

作者の心を明晰な対象が無言の広がり（余情）と共に語ってくれる。